ヴァズネセンスキー大通りから見たグリボエードフ運河（西向き）

世界遺産都市を歩く
第4回

水辺に首都の偉容をつくる

サンクトペテルブルク

文・写真
西村幸夫
東大教授

ネヴァ川にかかる宮殿橋の半ば南岸のエルミタージュ美術館周辺を見る

宮殿広場とアレクサンドルの円柱（写真提供：サンクトペテルブルク市。以下＊印）

デカブリスト広場と旧元老院（左）＊

●●●

現在、人口470万人を誇る大都市サンクトペテルブルクが、今からおよそ300年前に建設が始まる前はスウェーデンの小寒村であり、あたり一体はネヴァ川河口の低湿地であったということは、いまではなかなか想像しづらい。

しかし、日本も今からおよそ400年前に生まれた城下町が、大半の大都市の淵源となっているのであるから、ロシアと日本とは似たような歴史を共有しているといえなくもない。

ただし、決定的に異なるのは、18世紀から19世紀にかけて建設されたこの都市が、現在もほとんどそのままの都市構造と都市風景を維持している点である。これは日本と比べるまでもなく、欧州の都市の中でも例外的であるといわなければならない。

ヨーロッパへの窓として戦略的に重要なネヴァ川の河口を勝ち取ったピョートル大帝は1703年にサンクトペテルブルクの建設を開始する。1712年にはロシア帝国の首都をモスクワからここへ移すのであるから、当初から首都の偉容を意識してこの都市は作られたはずである。

イサク広場からモイカ川の東側を望む、遠くに見えるドームはカザン聖堂

1988年現在の保存地区．紫・赤・青の三段階の規制がかけられている＊

18世紀の第一四半期のサンクトペテルブルク図、ネヴァ川南岸の現在の都心部にはまだ砦があり、市街地としての開発はあまり進んでいない様子が見える（出典：Petersburg Project, 2006, p.24）

しかし低湿地に首都を建設することはそれほど容易なことではなかったようで、河口に展開する様々な島をどのように結びつけ、宅地化し、押し寄せる人口を吸収しつつ、いかに都市を次第に拡げていくかという課題のもと、スイス人建築家ドメニコ・トレッィーニをはじめとする何人もの建築家によって改訂に改訂を重ねて新都市の絵姿が描かれた。

それが一筋縄ではいかない複雑な都市パターンとなって今日、この都市に魅惑的な奥行きをもたらすことになった。

じっさい、都心の所在だけをみても、当初の対岸のペトロパヴァロフスク要塞周辺から、三角州にあたるヴァシリエフスキー島、そして冬の宮殿（現在はエルミタージュ美術館の一部となっている）がおかれる現在の中心地と18世紀においても二転三転している。これらの地区はいずれもネヴァ川に直接面しており、あ

グリボエードフ運河、右手はかつて運河に沿った街路であったがアレクサンドル2世がこの場所で1881年に暗殺されたことから教会が建てられ、道が迂回した。現在の「血の上の教会」である＊

グリボエードフ運河

イサク広場とイサク聖堂＊

たかも川の空間そのものが都市のスクエアとして中心に存在しているようだ。

現在の中心部であるネヴァ川南岸地区は旧海軍省の尖塔を焦点にネフスキー大通りなど合計五つの通りが放射状に延び、これに3本の主要な川／運河が自然な曲線を描きながら交差するという、かっちりとした陸路の構図とゆったりとした水路の構図とが入り組んだ複雑な空間を生み出している。

●●●

サンクトペテルブルクはしばしば「北のベニス」と称される。62本の川に360もの橋が架けられている現在の姿を思うと、それもうなずけるが、ピョートル大帝が首都建設を構想したとき、頭に思い描いていた都市はベニスではなくアムステルダムだったといわれている。たしかに水路の両側に広幅員の街路が平行して配置され、その奥に軒高を揃えた大規模居宅が水路に面して整然と並ぶ様は、商都ベニスというよりも海の王国オランダの首都に近いといえる。

モイカ川下流のニュー・オランダ周辺

市東部のスモーリヌイ聖堂＊

さらにいうと、サンクトペテルブルクは水のネットワークだけではなく、これにモニュメントを核としてビスタをきかせた街路の構図を巧みに取り入れているので、パリに似てなくもない。フィンランド湾にひらけた水辺の都でもあり、現在のウォータフロントにも先住者の出身国であるスウェーデンの首都ストックホルムを彷彿とさせる光景もある。アムステルダムとパリとストックホルムを足して3で割ったような都市といえようか。

ここは遅れてきた欧州の首都である。先達の首都を見習いながらさらに改善を加えたからこそ、現在の社会経済状況にも耐えることのできる、21世紀に向けた大都市のモデルとなりえる都市が生まれたのだ。

●●●

サンクトペテルブルクは1990年、「サンクトペテルブルク歴史地区と関連建造物群」として世界文化遺産に登録された。関連建造物群とはピョートル大帝の夏の宮殿（ペテルゴーフ）、エカテリーナ宮殿（ツァールスコエ・セロー）、ハヴロフスク宮殿（ハヴロフスク）などの近郊の建物を指している。

登録にあたってのイコモスの評価書はわずか3頁で、評価の根拠を述べた中核の部分は「レニングラードを世界遺産リストに掲載することはあまりに自明のことであり、細かい証明はいずれも不要のように思われる」という表現で始まっている。実に素っ気ない。サ

エルミタージュ美術館横の小運河の薄暮風景

ネヴァ川対岸から見たエルミタージュ美術館＊

ヴァシリエフスキー島の岬＊

ンクトペテルブルクのような知られた都市が世界遺産となるのは、当時としては誰も異論を挟まないような至極当然なことだったのだろう。

サンクトペテルブルクには現在もほとんど高層建築がない。見事に高さの揃った建物が水平に広がった歴史都市である。これは首都建設時からのルールであり、現在も中心部の建築物は上限48ｍまでの段階別に高さ規制がなされている。

市内にある指定文化財の数は７８００を数え、これには３３０の河岸（エンバンクメント）、２９５ヵ所の公園が含まれている。このうち世界遺産に含まれているのは36地区、１３６ヵ所である。

ただし、世界遺産の申請がなされたのは１９８９年、つまりソ連崩壊の混乱の時期であり、書類にも不備が目立ち、地区の再設定を含めて、現在、保存管理計画の改訂がすすめられつつある。なにしろ申請がなされたときは都市名もレニングラードだったうえに、申請した国も組織も解体してしまったのである（ちなみにレニングラードという名前は現在

モイカ川にかかる人道橋、ポチャムツキー橋

モイカ川で魚釣りをする人、奥はイサク聖堂

ネヴァ川対岸のペトロパヴァロフスク要塞＊

ヴァシリエフスキー島の夜景＊

はサンクトペテルブルク周辺の郡名として生きている。さらに旧称ペトログラードも市内の対岸の地区名として生き残っている）。

好調な経済に支えられてサンクトペテルブルクの歴史的建造物の保存修理は急速に進んでいる。修理補修費も旧ソ連時代はほとんど取るに足らなかったものが（だからこそ歴史的建造物が維持管理もされないかわりに取り壊されもしなかったともいえるのだが）、２００３年には５９３０万米ドル、２００６年には１億２９１０万米ドルへと急増している。経済の好転が建物の破壊と更新をもたらすのではなく、建物の保存と再利用へと活かされているのは、時代の趨勢や世界遺産登録による自己規制という面もあるだろうが、それ以前に、保存再生に値するすばらしい建築作品が数多く遺されていることによるといえる。首都の偉容がここでまた復活の起爆剤となっている。

●●●

しかしそんなサンクトペテルブルクにおいても、高層ビル問題がない

ヴァズネセンスキー大通りから見たグリボエードフ運河（東向き）

わけではない。とりわけ都市の東部、ネヴァ川対岸の川縁に計画されている高さ400m近い旧国営ガス会社の超高層ビルは、計画の最終段階を迎え、その是非を巡って白熱した論議を巻き起こしている。

都市の風景を文化的景観としてとらえて、広域的なスカイラインを保全論議の対象に加えようという機運がユネスコ内に高まっている。

そうなるとバッファーゾーンのあり方も再考を迫られることになる。従来、農地など農村風景にほぼ限られていた文化的景観の考え方を都市にまでひろげると、どのような論理が成立するのか、それが具体的に都市の姿をコントロールするのに機能するのか——百年一日のごとく変わらないように見えるサンクトペテルブルクの古くからの平らな都市のシルエットが、まさにそのことのために皮肉にももっとも先端的な景観の議論を引き起こしているのである。

（上）旧海軍省の尖塔から見た都心のスカイライン